

遊戯折り紙研究考(1)

—遊戯折り紙の起源について—

大森 隆子

Takako Ōmori

はじめに

折り紙はわが国独自の伝承遊びの一つである。手技により、正方形の色紙から平面的もしくは立体的な形を作り出し、その出来上がった姿を見て楽しんだり、用いて遊んだりする馴染み深い遊びといえよう。父母もしくは祖父母から子どもへ伝えられる家庭の遊びとして、また学校、幼稚園や保育所といった教育・保育施設等の場で教師や保育者から教えてもらう教材として現在に至っている。今日ではそうした子ども対象の遊戯折り紙のレベルを超えて、作家による伝統折り紙の復活や講習会、創作折り紙の発表や普及も盛んになっている。しかし筆者は、折り紙の原点は子どもたちが楽しんできた伝承の折り紙にあると考える。日本の子どもたちが、長期間に渡って親しんできた折り紙の魅力や特徴はどこにあるのか。また、教育・保育関係者は教材として何に効能や価値を見出してきたのか。こうした疑問を解くために、遊戯折り紙の起源を尋ね、その源並びに教育的・文化的価値について究明したいと考える。

本稿では、1、2で、遊戯折り紙のルーツについての論考を考察する。3で、その他の諸説を紹介し、「まとめに代えて」において、それらの検証を通して得られた課題を提言できればと考える。

1 梶浦真由美による折り紙起源考

折り紙のルーツについては、3節で紹介するように折り紙関係者より種々述べられている。しかし研究の対象として取り上げられたのは近年のことで、資料の発掘を含めてこれからの検討課題の一つと思われる。現段階では、折り紙の教育的価値の追求を念頭に研究されている梶浦真由美の論¹⁾を、折り紙研究の第一人者と評されている高木智の業績を含む研究者の労作をまとめておられる点で、基礎文献としてまず押さえておくべきものとする。したがって、氏の論考を考察することから始めたい。最初に梶浦がこのテーマに取り組んだ理由を紹介しておく。氏自身の言葉から引用すると、

わが国では、折り紙は主に幼児教育の分野で、教育的効果の高い教材として認知されており、どちらかというとならぬ遊びものという位置づけの基に、広く普及してきたことは周知の通りである。しかし、近年では（中略）多数の折り紙作家も輩出し、次々と新しい作品が発表されている。（中略）日本文化の一つとして世界中に浸透するまでに発展し親しまれ、国際交流の一助にもなっている。

しかしながら、この身近な紙を折るという日本の折り紙文化について、その起源をはじめとして意外に知られていないのが実情であり（紙が発明された中国が、折り紙発祥の地と信じている人も少なくないのではないだろうか）、百科辞典で調べても曖昧なところがある。そこで、本稿では、折り紙がどのようにして生まれ、私たちの生活の中に浸透し普及してきたのかを明らかにする²⁾。

とあり、多様な発展性を見せる現代の折り紙のその原点を解明することにより、歴史や文化の側面から広く折り紙の特徴を捉えたいとの意思を感じる。

考察に先立ち、梶浦が考える折り紙の定義と種別を紹介すると、前者は「身近な紙を折るという日本の文化」とし、後者は儀礼折り紙、遊戯折り紙、教育折り紙、現代折り紙の4種に区分する。特に断りがない場合は、遊戯折り紙をさすとしている。

氏はまず折り紙の材料である「紙」に着目し、その歴史を概観することから手がかりを得ようと試みている。その際の資料は柳橋真の「紙の歴史³⁾」である。それによれば、中国で発明された紙がわが国に伝来したのが大和・奈良時代といわれ、主として公文用紙や写経の用紙に当てられていた。平安時代の中期に入ると貴族文化（絵巻や物語・随筆など）が花開き、貴族たちの間で紙の使用が増大する。その紙が庶民に行き渡るのが室町時代で、安土・桃山時代から江戸時代にかけて生活の必需品とてなくてはならないものとなったという。そうした変遷を視界に置き、梶浦は以下に述べるように折り紙の成立時期を室町時代以降と想定する。

紙が、生活を営む上で貴重なものである間は、遊戯折り紙、言い換えれば「女・子どもの遊びもの」としての折り紙は、普及することが難しいと思われる。紙が大量に生産され、庶民でも容易に手に入れることができ、日常おしみなく使用されるようになりはじめて遊びとしての折り紙も浸透していくものと思われる。その意味では、折り紙の起源はさておき、その普及は紙が庶民層にまで浸透する、室町時代以降になるであろう⁴⁾。

次に氏は、本テーマの先行研究者として伴至誠、高木智、杉村卓二の三氏を挙げ、それぞれの論の整理を行う。まず伴至誠の説を取り上げ、そもそも折り紙は折形（図に示す）の一種として儀式用に供されたものに発していること、またその際の折り紙は神への奉納物（御幣や紙垂などにして献上する神具）と遊び（人間から供物を紙に包んで神に献上するという作法）に二区分されたとする。前者は「神の喜ぶ形の道具」に製作され、後者は包み方に様々な工夫が加えられて多彩化した。献上の相手も神そのものから、神の代理人（権勢者）へ、さらに一般の人たちへと順次身近な対象に移行し、それに連れて儀礼の体裁にも変化を生じさせていった。そうした儀礼用作法の

推移を武家儀礼の確立経緯と勘案して唱えたのが伴の説とする。具体的な伴の遊戯折り紙発祥説とは、

室町時代中期に將軍足利義満は、小笠原、伊勢、今川を礼法の御三家に命じたので、この御三家は包む礼法を体系化し、子どものころより、教育したのである。そのためには幼いころより紙になれさせ、子どもを引き付ける折り方を考え出す必要に迫られ、その中より遊びの折り紙が自然に発生したと思われる⁵⁾。

というもので、梶浦はこの説に説得力を感じるという。すなわち、「遊びとしての折り紙が生じる土壌が整うためには、折り紙を折るということ事態が、大人だけでなく子どもも含めて、その射程に入るようになるということも重要なことと思われる⁶⁾」からだとその理由を述べている。

次に挙げた高木智については、伴の折形起源説に立ちつつ一歩進めて教育的な視点を導入していると、梶浦は分析しているように思う。それは、「武士社会では、小笠原流の躰の一環として子どもに折り紙が教え込まれていた⁷⁾」という文言を引いていることに具体化されている。その点に関する考証を梶浦の文章より紹介すると、

ところで、この包み方の習慣は、現在の私たちの生活の中でも、例えば金銭の贈答の折にのし包みやのし袋が使われたり、品物の贈答にはのし紙が使われるなどの形で定着している。当時はこの包み方を「折形（おりがた）」といい、中国から日本へ、そして公家から武家儀礼へ、そして庶民へ、庶民の女子の教養へと伝わってきたものと推測されている。特に、江戸期の女子を啓蒙するための生活教養書である女訓物の影響が大きいとされ、前述した三家のうちの小笠原流折形が女訓物に掲載され（中略）、明治以降の女子教育においても礼法の主流をなし、現在へと受け継がれているものである⁸⁾。

とあり、現代の生活に定着している折形が、女子教育の中に引き継がれてきたことを高木の論から示唆を受けている。

続いて杉村卓二の説を取り上げ、杉村は折り紙の平安起源説を唱えた点で、他の二氏とは異なる見解を持つことを明示した。梶浦も「贈答、儀礼用の折り方が礼法の一つとして、朝廷・貴族の間で発展したのなら、その延長線上で、遊戯用折り紙も貴族

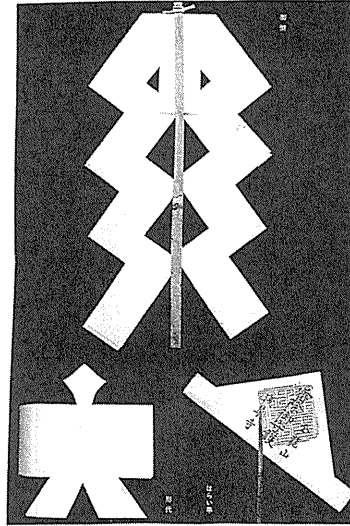


図 折形3種

上：御幣 右下：はらい串 左下：形代

(出所 柳橋真他『カラー日本の工芸8 紙』淡交社)

の間で生まれたのではないか、という仮説も成り立つではないか⁹⁾と、一応の所感を述べた上で、氏の説を検証した。

そもそも杉村説の出所は、喜多村信節による随筆集『喜遊笑覧』（文政13年 1830）に抄録されている、「折形の蛙」（『清輔朝臣集』より）と「折居の鳥」（『好色一代男』より）で、ここに折り紙の発祥を解く記述が認められるというのである。杉村は、平安時代の『清輔朝臣集』を出所とした孫引きの「折形の蛙」に着目した。それは、

「折形の蛙」の項で、「女をうらみて云々。あおき筋ある紙にてかへるのかたを作りて書きつけてやりける云々。」と書かれた箇所がある。もう二度とあわないでしようと心に誓ったものの、やはり恋人のことが忘れられない。そこで、よりを戻すために、別れた女の人に「青い筋のある紙で蛙の形を作って、（それに歌を）書いて送った¹⁰⁾」

という件で、原典は平安時代末に京都の歌人藤原清輔（1104～1177）が成した歌集である。この「青い筋のある紙で作った蛙」を折り紙についての最も古い記録とし、折り紙の平安起源説の根拠としたものである。

その説に対し、高木智が主として以下の3点を根拠に異論を唱えていることを併せて紹介している。一つが、上述の資料のもう一方の「折居の鳥」を根拠としたもので、

「喜遊笑覧」の中の「折居の鳥」の項で「或時は折居を遊して比翼の鳥の形は是ぞ云々これ紙の折方にて鳥を作るなり」と書かれた箇所、折居（おりすえ）という言葉が現在の折り紙のことであり、平成3年現在それ以上古い記録は、まだ発見されていないというのである¹¹⁾。

との指摘である。二つが、折り紙が絵に登場する初期のものは「折り鶴」が専らで、後は「船」や「虚無僧」など武士の近辺にある題材が中心であること、三つが、近年の文献研究の結果、前述の「……あおきすちあるかみにて……」は、「……あおきすちあるうりにて」すなわち「青き筋ある瓜」とするのが正しいと検証されたことによる。（筆者傍点）

以上のように梶浦は、3氏の先行研究を押さえた上で、折り紙の起源について伴、高木両氏の見解を踏襲した。

筆者としては、伴氏が指摘するように室町幕府が命じた折形の御三家が、それを代々継承する上で幼い頃より子どもに教育する中で、自然発生的に子どもの興味をそそるような折り方が考案された。それが遊戯折り紙の始まりであるとの推測に説得力を感じる。高木氏が指摘するように、文献に現れる折り紙の題材が武士階級の周辺に得られていること、そして何よりも折り紙界の常識として、「折り鶴」がおそらく中世の室町時代にはその形が完成していたといわれている背景を鑑みても、室町時代起源説が有力であると筆者は考える¹²⁾。

すなわち、折り紙の起源は儀礼の用途として発展した折形に発し、その継承を家職として義務付けられた武士の御三家がその子弟に幼い頃より興味を持たせるべく意図的に工夫したところに始まるとする。したがって成立時期については、室町時代とみ

る。併せて、氏の考察による和紙の歴史の視点からも、室町時代説は裏づけられたとする。

2 高木智による折り紙起源考

前節で梶浦も取り上げているように、現在この分野の研究の第一人者は高木智であろう。したがって、本節では氏の説を取り上げておきたい。本稿では、「折り鶴 その歴史を探る¹³⁾」、「古典にみる折り紙¹⁴⁾」並びに「おりがみいまむかし(四)¹⁵⁾」の論考を基として考察する。

はじめに、高木が折り紙の起源をテーマに掲げて取り組んだ理由について述べておきたい。著書『古典にみる折り紙』の中で、氏はその動機を次のように語っている。それは、

そもそも、おりがみの歴史については、これまでごく一部で論じられてきた程度で、むしろアメリカなどで活発に伝えられているようです。しかし、残念なことに、「おりがみは紙の創造とともに生まれた」という、先達の大胆な推論が、かえって誤解のもとになって、アメリカでは、おりがみの故郷は中国だというふう
に信じこまされているそうです。

それでは、本当のおりがみは、いつ、どこで生まれたのか、そのルーツを知りたい、という願望を充たすため……¹⁶⁾。

というものである。それを起点に氏は資料の収集に着手し、以後、それまで見過ごされていた文献や絵図（浮世絵、絵草紙、着物の柄行他）、新発見の文書など膨大な量の諸資料の集積をされた。

それを基に先駆的な研究成果を発表されており、その一つが、折り紙史上最古とされる資料『千羽鶴折形』の考察を巡る研究である。一枚の紙に切り込みを入れつつ、切り離さずに繋がったまま複数（2～97羽まで、49種のパターン）の鶴を立体的に折り上げていく精緻な技法を紹介したその繋ぎ鶴の本から、原型となる鶴の折り方の定型が誕生した背景を推敲し、また、その原姿である鶴のイメージに思考を巡らしていくのである。

「折り鶴」は、偶然に生み出されたものではありません。もともと、「鶴」そのものが長寿の象徴として、古くから中国で深い意味を持っていたことは、『千羽鶴折形』の随所に記されていることでもおわかりの通りです。（中略）「鶴は千年——」という諺が、平安時代には、もう定着していたのです¹⁷⁾。

と、古来、鶴のめでたい象徴性が確立されていたことに、「折り鶴」誕生の必然性と、その後も忘れられることなく、今日まで生き続けてきた理由があるとする。

「折り鶴」誕生のもう一つの要件は、日本に在った、紙を折るという習慣だという。それは、和紙の特質と、また、日本人本来の几帳面な性格（折り目をきちんと付ける）とが成した業とする。

次に、折り紙誕生のルーツに、紙を折るという作業の途上で生じた根本的かつ質的な変化を洞察している。それは、平安時代の紙を折るという手技が、

ある起点から折り始めるというよりは、完成された形がまずあって、そう折るにはどう折っていけばよいのかと考えるというふうに、折られているように思われます。それは、美しい形を、しかも自分しか折れない形を折ってみたいという、折る人の一つの美学によって折られた、ということができないのではないのでしょうか。少なくとも平安朝を中心にした貴族社会の時代には、そのような折り方が主体であったと思われ¹⁸⁾。

という個人的な美学や創造力に依拠していたのに対し、武家社会になると、貴族社会の慣習を習得する目的性から、覚えた形や型をよく記憶してその通りにできる手技へと変質していった。そのため、簡便性や合理性といった面の追求が優先されることとなった。さらに、子ども用折り紙の誕生は、紙を折ることを職とする家に指定された主人のやむを得ない事情によるものと推測する。

幼い子のうちから紙に慣れさせることも必要です。それで、できるだけ単純な折り方で、折り込みの反復練習をさせるとともに、子どもを引き付ける作品を考えだすことが必要になったと思われ¹⁹⁾。

あるいはまた、子供自身が、単純な折り方に飽き足らなくて、紙をいじりまわしているうちに、ひょっこり一つの形ができ、それを何かに見立てたのかも知れません。子供の創造力は、おとなよりはるかに豊かだからです¹⁹⁾。

このように、高木は折り紙作家として折り紙を実際に作成してきた経験を、資料考証の解釈に役立てている。

もう一つ、折り紙のルーツを求めて蒐集した古典資料を基に集大成した『古典にみる折り紙』に触れておきたい。そこに掲載されている選りすぐりの31点の中から、特に興味深い2点について押さえたい。その1は、井原西鶴著『好色一代男』(1682年)で、文中登場する「おり居(すえ)」が折り紙をさすこと、そしてこれが遊戯折り紙最古の文献であるといわれているものである。氏は原典をあたり、事実の確認を行っている。その箇所を引くと、

内容は、世之介という色男の生涯物語ですが、(中略)「或時は、おり居を、あそばし、比翼の、鳥のかたちは、是ぞと、給はりける、花つくりて、梢にとりつけ、連理は是、我にとらすと、よろつに、つけて、此事をのみ忘れず 云々」という文があり、「おり居」という言葉が、おりがみに当たるわけ²⁰⁾。

と述べている。しかし、「比翼の鳥」、「花」、「連理」という折り紙名が挙げられているものの、具体的姿形は不明で、空想かもしれないと追記している。その2は、『けいせい折居鶴』(1711～16年という説あり)で、話しの一部を紹介すると、

紺屋六兵衛の一人娘お雪は、寺子屋のお師匠様から教わった薦僧を清紙で折って、門四郎という野郎だねに渡します。門四郎は、鶴を折ってお雪に返すのです。(中略)話はもとに戻りますが、お師匠様は、こどもにほうびとして、薦僧のほ

か、船も折ってやっています。嬉しいことに図があって、鶴や薦僧が書かれているのです²¹⁾。

というものである。男女が鶴の折り紙を作って交換する様を描いているのだが、高木は、当時寺子屋の師匠が子どもに折り紙を折って与えていた様子が描かれている画面に着眼する。それを、「それまで折り紙は、武士社会で、母や祖母から小笠原流の躰として教え込まれていたわけですが、その時点ではっきりと庶民の遊びとして伝えられるようになった²²⁾」という証拠の資料とする。

このように、高木は綿密な資料考証を踏まえ、折形を子弟へ継承させるべく始まった紙折りの技が、武士階級の教養や躰に広がり、そしてまた、庶民の遊びの折り紙に移行したターニングポイントを検証しているのである。

3 折り紙の起源に関する諸説

学術的な考証の裏付けを持った説ではないが、折り紙作家、折り紙普及者などさまざまな形で折り紙にかかわる諸氏が、その経験・知見を通して思考した折り紙の起源に関する見解を紹介しておきたい。それらの中に、真理を示唆する貴重な手がかりが含まれていると思うからである。

折り紙作家である笠原邦彦は、その著書²³⁾において、1797年に刊行され、現存する最古の折り紙資料とされる魯高庵義道作『千羽鶴折形』を、遊戯折り紙の資料としても捉えている。一見難解に見える作品群だが、実際に子どもが折り、遊んでいる絵図があること、また自身が幼い頃、好きで折っているうちに偶然同じ作品が出来上がった経験を持つことなどを根拠にしている。

同じく折り紙作家である河合豊彰は幼児教育者の副島ハマの説を引用し、日本人の生活様式との関連から折り紙が発達したとする。

日本人の生活様式は、外国人の生活習慣とは異なり、物を折ったり、たたんだりすることが多い。着物や下着、蒲団など、しまうときは平面にたたむ習慣がある。また、贈答用につける熨斗、祝儀の赤飯の塩入れの包みや、お客に出す菓子を載せる紙、正月のおとそに水引で結びつけられた折り鶴などと、折り紙が日常生活の中に、浸みこんでいる。日本人は長い袖の着物を着て、畳の上ですわり、不活発な生活様式をもっていたが、この静かな暮らし方の中で、しぜんにおはじき、あやとり、歌かるたなどとともに、折り紙遊びが流行したのだらうと²⁴⁾。

と述べているように、畳む習慣や外履きを脱いで室内においては座る習慣にその由来を重ねる。河合はまた、江戸時代に入り庶民の生活に余裕が生まれことにも遊戯折り紙のルーツを見て取っている。

江戸末期の国学者、喜多村信節の著した『喜遊笑覧』には、折り紙についてのおもしろい話が出ています。

「此の頃浅草に焼塩など商う者、紙折りたたみて種々の物を作り、人物、鳥獸何

にても人の望みに任せて造る者あり、一奇と称すべし」とあり、これで江戸末期に折り紙名人がいたことがわかります²⁵⁾。

このように、物売りの座興の一つに折り紙のあったことが記されており、江戸の庶民が楽しんでいた様子が記録されているのである。

日本の伝統的な包み方の研究をされている有馬は、江戸時代の女子教育の生活教養書といえる女訓物の検証を通して、それらには必ずと言っていいほど多数の「折形」の紹介図が掲載されていることを突き止める。このことから、当時女子にとって「折形」を習得することは大切な素養と考えられていたのではと推量する。

女訓物以外のほかの文献を当たってみると、男子の生活教養書である庭訓物には「折形」ではなく、書状(手紙)の封じ方や包み方、包んだ品物や器物にける緒(紐)の結び方が詳しく図示されていて、女訓物に見える折形図とは趣を異にしていました²⁶⁾。

有馬はこの「折形」と折り紙遊びの關係に言及はしていないが、このように、女子の教養として位置付けられていた「折形」の手解きとして、女兒の遊びに取り入れられたのが折り紙遊びのルーツと考えるのも、的外れなこととはいえないのではなからうか。ところで「折形」には「熨斗」と包装の二種があるが、「熨斗」は

あわびの肉を薄く剥ぎ、延ばして乾燥させた物で、古くは食料に、後に儀式の饗宴の肴とし、江戸中期ごろから進物には必ずのし鮑を添えたものです。現在ものし包み、のし袋と称するように、それぞれ右肩にのし包みの絵がプリントしてあったり、小さなのし包みが貼り付けてあったりします²⁷⁾。

と説明されるように、現在では象徴化した定形物を用いるのが通例であるが、その形の特徴は折りひだにあるといえる。

「折形」の真の熨斗は美しくバランスの良いひだを幾重にも整え中央を水引で結んでいます。この端正に重なり合ったひだの取り方は、十二単の襲衣や襲色目に通ずる日本独自の美しさと言えます²⁸⁾。

とあるように、日本の贈進文化の形式にこの折りひだが継承されてきたことは、日本人独特の美意識の一つに折りひだをみることもできよう。

折形礼法の普及を図っている山根一城は、

「折形」(おりがた)とは、よい人間関係を作るために金品を贈るときに、和紙で品物を包むやり方で、礼の気持ちを表した日本古来のものです。上級武家の間で秘伝として伝えられてきた六〇〇年もの歴史をもつ日本独自の大変美しい文化です²⁹⁾。

と折形の歴史に触れた上で、折り紙との關係について次のように語っている。

蝶の形や鶴の形を折った、儀式用の折形「装飾折紙」はその造形のおもしろさから、礼法を離れ、江戸時代、紙の普及とともに女性や子どもの遊びとして一気に発展し、普及しました。「遊戯折紙」と呼ばれる世界中で人気の「折紙」のことです³⁰⁾。

これによれば、造形のおもしろさ、すなわち女性や子どもたちを捉える遊び心が折り紙のルーツということになる。

和紙の老舗の後継者であり、広く折り紙の普及に努める小林一夫は、折り紙のルーツについて次のように述べている。

折り紙の歴史をさかのぼると、紙が高価だったため神聖なものとされていたのでしょうか、神事に使われていたのが始まりでした。御払いのとき神主さんが振っている棒や、横綱の綱に垂れ下がっている細長い白い紙（「御幣」や「紙垂」）は折り紙のルーツとも言えるでしょう。

平安時代には、儀礼作法が重んじられ、薬味やお金、お香、扇子などを包むためのさまざまな折り紙（折形）が生まれました。じかに物を置くのではなく、紙をひと折りすることに、感謝の心や、やさしさが込められていたのだと思います。

現在、私たちが折り紙と呼ぶ“つる”や“やっこさん”などの遊戯折り紙は、江戸時代頃から折られていたというのが定説とされています³¹⁾。

桑名の連鶴の研究と普及に努める大塚由良美は、そのルーツを神様へ捧げる「御幣」や「紙垂」に見ている。連鶴を作成する際に用いる用紙は長方形が基本であり、はさみによる切り込みを駆使して作成することから関連性を実感したものと思われる³²⁾。

こうした諸説を概観すると、折形を折り紙のルーツと考える者が大勢であることが分かる。

まとめに代えて

以上の考察を踏まえ、折り紙のルーツは折形にあるという説はほぼ定式化されたものと考えられる。成立時期については、室町時代から江戸時代が主流を占めるが、確証は今後の資料発掘に委ねたい。儀式用折形（小笠原流他）から遊戯折り紙への転換点については、資料上で確認するのは難しい面があるものの、筆者は笠原の説³³⁾を有力な説と捉えておきたい。それは、遊戯折り紙を伝承折り紙と古典折り紙の二系統から成るものと分析した視点によるもので、前者は、昔から伝えられてきた作品（「奴さん」、「おさんぼ」、「ふうせん」、「あやめの花」など）をさし、後者は書物に記録された作品（「蓬萊」から「百鶴」に至る連鶴、忠臣蔵に登場する「人物」、「ほおずき」、「とんぼ」、「たこ」、「せみ」など）で、『千羽鶴折形』（1777年）、『折形手本忠臣蔵』（1800年頃）、『かやら草』（1845年）の3冊で紹介されたものをさす。

この二系統の作品群の交点に遊戯折り紙の源流が隠されているように思えるのである。

ところで折形から折り紙への転換には、大人向けの手技から子ども向けの手技へというキーワードが存在する。それには、折形が内包している要素に加えて、子どもを引き付ける新たな要素が付加されなければならないのである。具体的に言えば、簡便性、模倣性、不思議さ、動き、デザイン性、創造性など、発達段階に沿いつつ遊び心

に満ちたものといえようか。

第二次大戦後、我が国の教育界に折り紙批判が起こり、折り紙は一時衰退の危機に遭遇した。その理由・背景について、児童文化の実践兼研究者である加古里子は次のように述べている。

戦前の幼児教育の場では、恩物や折り紙といったものが教材として大きくとり上げられていました。しかし敗戦後、少々思慮の深くない進歩的教育論が「型通り、順序通りに紙を折ったりひっくり反させるだけのおり紙などに、何の価値があるものか、これこそ押し付け・抑圧・創造性否定そのものである」とかなんとか、勇ましく言ったり、(中略)子どもにはやりたいことをやらせ、したくないことはしなくてもよいよという甘やかし放ったらかしの風潮の中で、面倒な折り紙遊びは消えてゆきました³⁴⁾。

今日では欧米諸国の評価による逆輸入の形で、再び折り紙は着目され、復活傾向にあるが、改めて子どもにとって折り紙はどのような意味や価値があるのか、大人たちは今一度熟考する必要がある。その際手がかりとなるのが、折り紙のルーツを探索することから得られたその本質である。折り紙は、日本人の几帳面さ・器用さ、美意識、礼の心などとともに、遊び心溢れる楽しさ・不思議さに満ちた創造的な側面を含む文化的・教育的な世界を持つものだというのである。今後も引き続き折り紙を巡る諸問題について考察を行っていきたい。

■注

- 1) 梶浦真由美「我が国における折り紙の歴史」(『北海道文教短期大学研究紀要』第22号、1999年、pp 29～41)。
- 2) 同上、p 29。
- 3) 柳橋真「紙の歴史」(『カラー日本の工芸 紙』淡交社、1978年、pp 21～78)。
- 4) 前掲「我が国における折り紙の歴史」pp 30～31。
- 5) 同上、p 31。
- 6) 梶浦真由美「遊戯折り紙のルーツを探る」(『家庭科教育』74巻3月号、2000年、p 65)。
- 7) 前掲「我が国における折り紙の歴史」、p 32。
- 8) 同上、p 31。
- 9) 同上、p 32。
- 10) 同上。
- 11) 同上、p 33。
- 12) 同上、p 34。
- 13) 高木智「折り鶴 その歴史を探る」(『秘伝千羽鶴折り紙解説』日本折り紙協会、1991年、pp 125～135、所収)。
- 14) 高木智『古典にみるおりがみ』日本折り紙協会設立20周年記念号、日本折り紙協会、1993年。
- 15) 高木智「おりがみいまむかし」(四)(『鷹陵』no. 144、仏教大学通信教育学部発行、1995年3月、所収)。
- 16) 前掲『古典にみるおりがみ』p 1。

- 17) 前掲「折り鶴 その歴史を探る」p 126。
- 18) 同上。
- 19) 同上。
- 20) 前掲『古典にみるおりがみ』p 4。
- 21) 同上、p 9。
- 22) 同上、p 10。
- 23) 笠原邦彦『最新折り紙のすべて』日本文芸社、1999 年、p 8。
- 24) 河合豊彰『おりがみ』保育社、1970 年、p 130。
- 25) 同上、p 135。
- 26) 有馬澄子「日本の伝統的なラッピング——江戸の女訓物からの伝承「折形」——」（『家庭科教育』70 巻 11 号、1996 年、p 81、所収）。
- 27) 同上、p 82。
- 28) 同上、p 84。
- 29) 山根一城『暮らしに使える折形の本』PHP 研究所、2007 年、p 1。
- 30) 同上、p 94。
- 31) 小林一夫『日本の伝統折り紙』中央公論新社、2008 年、p 2。
- 32) 大塚由良美氏への聞き取り調査（2008 年 10 月 16 日）による。
- 33) 前掲『最新 折り紙のすべて』p 8。
- 34) かこさとし『日本の子どもの遊び（上）』青木書店、1979 年、pp 74～75。